『バスカヴィル家の犬』にみる
狂犬病恐怖と科学者のイメージ

大渕　利春

はじめに

犬は人間の最も古いパートナーと言われる。現代においても愛玩犬として、番犬、猟犬、警察犬、あるいは軍用犬として、様々な分野で人間と深くかかわっている。なかでもイギリス人は犬好きの国民として知られている。現存する犬種の中でも、イギリス人によって生み出されたものは少なくない。

ヴィクトリア時代には、ヴィクトリア女王が犬好きであったことや、人々に経済的ゆとりがうまれたことなどが原因で、ペットとして犬を飼うことが流行した。1859年には、ロンドンで世界初のドッグ・ショウが開催され、1873年にはケンネル・クラブが創立された。エドウィン・ランドシーアのような犬の絵を得意とする画家も登場した。

イギリス文学においても犬は数多く登場する。無類の犬好きであった『フランダースの犬』の著者ウィーダの作品においては、多くの犬が登場し、重要な役割を演じている。

アーサー・コナン・ドイルのシャーロック・ホームズものの長編『バスカヴィル家の犬』に登場する犬は、文学史上最も有名な犬の一つであろう。これは、殺人を目論む犯人が、大型の猟犬に夜光性の燐を塗ることで「呪いの魔犬」に仕立てる話である。この作品はホームズものの最高傑作とされ、ミステリの古典として不滅の光を放っている。

同時に、『バスカヴィル家の犬』はホームズものとしてはやや異色で、最後にはすべてが科学的に説明されるとはいえ、怪奇小説・恐怖小説としての

側面も強い。母親宛ての手紙の中で、本作についてドイル自身が怪奇小説を執筆している、と述べている。ドイルの伝記を書いたミステリ作家、ジョン・ディクスン・カーは、『バスカヴィル家の犬』はホームズものの中で唯一、ホームズが物語を支配するのではなく、物語がホームズを支配している、と述べている(1)。

ホームズを支配する恐怖の物語の、その恐怖の源泉がバスカヴィル家にまつわる呪いの魔犬伝説であることは言うまでもない。しかし、ホームズ自身は科学の人で、伝説、迷信に怯えるような人物ではない。にもかかわらず、『バスカヴィル家の犬』でホームズが示す警戒心、ある種の怯えは、他のホームズ作品には見出し難い異色のものである。この作品を恐怖の物語としているのは呪いの伝説だけではない。

ヴィクトリア時代において、犬は愛されただけではなかった。その一方で極度に恐れられもした。Neil PembertonとMichael Worboysは、『バスカヴィル家の犬』に狂犬病への恐怖が反映されている、と指摘している。19世紀中盤から20世紀初頭までのイギリスでは狂犬病対策が大きな社会問題となっていた。

本論文では、『バスカヴィル家の犬』における狂犬病の影響を考察し、ヴィクトリア時代の科学者のイメージに焦点をあて、科学者と狂犬病の関係を探りたい。

1. 『バスカヴィル家の犬』における狂犬病恐怖

『バスカヴィル家の犬』において、犯人ステイプルトンが犬を使って殺害した人間は二人－チャールズ・バスカヴィルと脱獄犯のセルデン－である。ヘンリー・バスカヴィル襲撃はホームズたちによって防がれた。

ピエール・バイヤールは『シャーロック・ホームズの誤謬 「バスカヴィル家の犬」再考』において、犬の無罪を主張している。ジョン・サザーランドも犬を用いての殺人に疑義を呈している。また、水野雅士は『吾輩は猫で

ある』にならって、魔犬の一人称で語るパロディ小説『吾輩はバスカヴィル家の犬である』を執筆し、そこで魔犬の無罪を主張している。こうした作品が書かれることは、『バスカヴィル家の犬』において、犬による殺人という設定にやや無理があるからであろう。ホームズものにおいては、その非科学性が指摘されることは珍しいことではなく、ドイルがそうした点にあまり頓着しない作家であった、と言えばそれまでである。しかし、『バスカヴィル家の犬』では犬に関する描写においてかなりの専門的知識が示されており、その点を考慮するなら、やはり犬による殺人には違和感がある。

チャールズ・バスカヴィルの死因は犬に追いかけられたことによるショック死である。しかし、バイヤールの主張をまつまでもなく、犬に対する恐怖心だけで人は死に至るものであろうか。呪いの魔犬の伝説があるとはいえ、殺人を企てるものが選択する手段として犬をけしかけるというのは不確実にすぎる殺害方法ではないだろうか。犯人のステイプルトンはホームズが舌を巻くほどの知能犯である。ステイプルトンほどの知能犯が犬による殺人計画をたてるという設定は、本格ミステリとしては瑕疵といっても過言ではないだろう。

高齢で心臓の弱いチャールズ・バスカヴィルの場合はまだしも、ステイプルトンの次なる標的、ヘンリー・バスカヴィルはおよそ30歳という若さで、呪いの魔犬の伝説など歯牙にもかけない豪胆な人物として描かれている。ヘンリーがカナダ帰りという設定も、古い伝説にとらわれた人間ではないことを強調するためというのが理由の一つであろう。現代の読者の中には、ヘンリーと同様に呪いの伝説などでは恐怖を感じることができない者が多いのではないか。しかし、ドイル自身、それに同時代の読者はこれを恐怖の物語ととらえた。ドイルが犬の襲撃による殺人、というアイディアを用いた背景には、現代の我々には考えられないほどのヴィクトリア時代の人々の犬に対する恐怖心があったと想像できる。

ホームズに助言を求めるモーティマー博士によれば、死の数か月前から、チャールズ・バスカヴィルの神経は、伝説に怯えるがゆえに「極度の危機に

瀕していた。」そして、チャールズの死の有様は次のように描写されている。

Sir Charles lay on his face, his arms out, his fingers dug into the ground, and his features convulsed with some strong emotion to such an extent that I could hardly have sworn to his identity. There was certainly no physical injury of any kind. (*The Hound of the Baskerville*s, 17)

魔犬による二人目の犠牲者、脱獄犯のセルデンは崖からの転落死であるので問題はない。一方、チャールズ・バスカヴィルは犬に噛まれるなどの外傷によって死に至ったのではない。犬に追跡されたことによる恐怖だけで死亡しているのである。ホームズは“He (Charles Baskerville) fell dead at the end of the alley from heart disease and terror.”（140）と語っている。

Neil PembertonとMichael Worboysによれば、『バスカヴィル家の犬』には狂犬病を示す多くのサインが散りばめられている(2)。例えば、上記の引用にあるチャールズ・バスカヴィルが示す歪んだ死相、ヒステリー的症状などである。チャールズの死に顔は、本人とは判別できないほどに歪んでいた。次章でも述べるが、狂犬病への恐怖が蔓延するあまり、実際には罹患していないにもかかわらず、狂犬病に近い症状を発症し、極度の不安に駆られる者が存在した。ダートムアの沼沢地に潜む魔犬が吠える声に怯え、不安状態にいたチャールズの症状は、狂犬病に怯え体調を崩した者の症状に似ている。

また、魔犬にまつわる描写も狂犬病の犬の症状に似ているという。ヘンリー・バスカヴィルを襲撃するためにホームズたちの前に出現した「呪いの魔犬」は次のように描写されている。

A hound it was, an enormous coal-black hound, but not such a hound as mortal eyes have ever seen. First burst from its open mouth, its eyes glowed with a smouldering glare, its muzzle and hackles and dewlap were outlined in flickering flame. (130)

『ヒトの狂犬病』によれば、狂犬病に罹患した犬の特徴としては、神経質で落ち着きがなく、怒りっぽく、なんにでも噛みつく。嚥下筋の麻痺のため、涎を垂れ流す。ヴィクトリア時代のイギリスでは、狂犬病への恐怖から犬に口輪をはめることが多かったが、ステイプルトンの犬もまた、普段は口輪をはめられていたと想像される。ステイプルトンは魔犬を飢餓状態におき、その攻撃性を高めていた。それは狂犬病の犬のそれに近い攻撃性を魔犬にもたせることになった。

さらには、ワトソンがダートムアの沼沢地で2度にわたって感じる息苦しさ、大気の変化に対する敏感さもまた狂犬病の症状に似ているという。同じく『ヒトの狂犬病』によれば、狂犬病患者は強い不安に襲われ、患者の約半数が嚥下障害を起こす。そのため、水を飲むことを恐れるようになるため、別名恐水病とも呼ばれる。さらに患者は風を恐れるようになるため恐風症とも呼ばれる。その後、高熱、幻覚、麻痺の症状が現れ、死に至る(3)。医師であったコナン・ドイルは当然こうした狂犬病患者の症状に知悉していたであろう。

ステイプルトンが普段魔犬を隠しておいたのは沼沢地の中の浮島である。そこは以下のように描写されている。

Rank reeds and lush, slimy water-plants sent an odour of decay and a heavy miasmatic vapour onto our faces. (134)

“miasmatic”とは元来マラリアを発生させると考えられた毒気のことだが、狂犬病の犬は瘴気を放ち、病気を蔓延させると考えられていた。

作中、狂犬病（rabies）や恐水症（hydrophobia）という単語は一度も用いられていないうえ、ステイプルトンの犬が狂犬病であった、というわけではない。しかし、コナン・ドイルは意識的にせよ無意識的にせよ、犬のもたらす恐怖を表現する為に狂犬病を示す暗示を作中にちりばめることになっ

た。狂犬病のない現代の日本に暮らす日本人にはやや違和感のある過度の犬への恐怖も、ヴィクトリア時代のイギリスの人々にとっては違和感のないものであったのかもしれない。

2. イギリスのおける狂犬病の歴史

今日のイギリスは、日本などとともに狂犬病を根絶した国と言われる。ここで、イギリスにおける狂犬病の歴史を簡単に辿ってみたい。

イギリスにおいて狂犬病が根絶されたとされるのは1902年のことである。『バスカヴィル家の犬』は1901年から翌年にかけて『ストランド・マガジン』に掲載されたが、事件は1889年に設定されている。そして、これは狂犬に対する恐怖が高まっていた時期であった。

ヨーロッパでは18世紀から各国で狂犬病が流行し、イギリスでも34～35、69～70年にかけて犬の狂犬病が流行した。そのため、犬を係留しておくことが義務付けられ、野良犬を駆除する為に懸賞金がかけられた。

19世紀に入ると、狂犬病はさらに流行する。1830代後半からイギリスでは人も狂犬病に罹患するようになり、死者も出始める。つまり、ほぼヴィクトリア時代を通じて、イギリス人は狂犬病に恐れおののいていたことになる。30年代から世紀転換期までの70年ほどの間のイギリスでの狂犬病による死者は1225名にのぼる。70年でこの死者数を多いと取るか、少ないととるかには様々な解釈があろうが、平均すると年間20人程度という計算になる。実際は年によって死者数はかなり乱高下するが、全体的にみて、イギリス人のこの病気に対する恐れはやや過剰と言ってさしつかえあるまい。『階級としての動物』によれば、町に野良犬が一匹いただけで大混乱が起き、実際に狂犬病に罹患していなくても、不安だけで「精神的な恐水症」を起こす者もいたという(4)。実態以上に狂犬病への恐れは大きかったと言える。1885年にフランスのルイ・パスツールが狂犬病ワクチンを開発したが、90年代にいたるまで、医師たちの間でも狂犬病に関する医学的な統一された見解がな

かったほど、狂犬病は謎の病気であった。そのため、犬に対する科学的根拠のない盲目的恐怖が蔓延することになったのだ。新聞紙上では、“shocking”、“dreadful”、“melancholy”、“distressing”、“terrible”といった形容詞を用いて狂犬病の症状が報道された。また、犬の死体が放つ瘴気が病気を引き起こすとも考えられた。当時のロンドンはたいへん不潔な街で、それが伝染病の蔓延を助長していた。

犬への過度の恐怖は、犬への蛮行へとつながった。犬を殺せば病気の毒が中和されると考えられ、犬の虐殺が横行し始める。また、狂犬病の犬は犯罪と結び付けられ、社会の退廃の象徴とも考えられるようになる。

狂犬病に対する法整備はしばしば行われている。1866年にはContagious Disease Actが成立し、翌67年にはMetropolitan Street Actが成立している。これは警察官が迷い犬を発見し、狂犬病が疑われる場合には、口輪をはめることを許可する法律である。そして、Dog Houseと呼ばれる犬を収容する施設に連れて行くことになる。87年から88年にかけて、この法律に基づいて警察に捕まえられた犬の数は、1か月で1457頭、うち殺処分された犬が58頭であった。1871年にはDog Actが成立する。これも迷い犬に関する法律で、やはり危険と思われる迷い犬を殺すことを許可する法律である。1866年には、雑誌『パンチ』に犬と戦う警察官の描いた戯画が掲載されている。当時、犬を取り締まるパトロールが頻繁に行われていたのだ。『バスカヴィル家の犬』ではヘンリー・バスカヴィルとホームズの間に次のような会話がなされる。

“We (Henry Baskerville and Watson) heard the hound on the moor, so I can swear that it is not all empty superstition. ...If you can muzzle that one and put him on a chain, I'll be ready to swear you are the greatest detective of all time.”

“I think I will muzzle him and chain him all right if you will give me your help.”（119）

上の引用にあるような犬を捕まえて口輪をはめる、という行為は、実際にイギリス各地で見られた光景なのだ。

3. コナン・ドイルと犬

コナン・ドイルが犬をどう考えていたのかについてははっきりしない。ドイルは犬好きであったとする研究者がいる一方、犬嫌いだったとする研究者もいる。いずれにしても、彼の作品中に犬が多く登場することは確かである。

『バスカヴィル家の犬』以外にも犬が活躍する作品をドイルは書いている。そもそも事件捜査をするホームズが犬に例えられることがある。長編『四つのサイン』ではホームズは捜査にトービーという犬を使っている。「スリークォーターの失踪」ではポンピという犬を使ってホームズは犯人を追跡する。警察が捜査に犬を用いることが一般的になる以前のことで、ここにドイルの先見性を見ることも可能である。また、『バスカヴィル家の犬』では、ホームズは依頼人であるモーティマー博士のステッキについた犬の歯形から、博士の愛犬がスパニエルであることを看破している。さらには、「這う男」でホームズは犬に関する論文の執筆を考えている、とも述べている。他にも、「サセックスの吸血鬼」、「ライオンのたてがみ」、「ぶな屋敷」、『恐怖の谷』などの作品に犬が登場する。犬種もスパニエル、マスティフ、テリア、ブラッドハウンドなど様々である。

こうした事実はドイルが犬好きであったことの証左とも解釈できる一方、ホームズは『バスカヴィル家の犬』以外でも犬を殺していて、動物に対して冷淡に見えることもある。『緋色の習作』では、ホームズは死にかけの犬を使って毒薬の効用を試している。

犬以外の動物で事件に深くかかわるものも多く、「まだらの紐」の蛇、「銀星号事件」の馬、「ライオンのたてがみ」のくらげなどがある。『バスカヴィル家の犬』を思わせる恐ろしい動物が登場する作品をドイルは他にも執筆し

ており、動物に対してある種の恐怖をドイルは抱いていたようだ。例えば、短編「狐の王」や「ブラジル猫」は『バスカヴィル家の犬』の雛型とも言える作品で、怪物的動物が登場する。

なお、呪いの魔犬はステイプルトンがロンドンで購入したもので、マスティフとブラッドハウンドの混血である。（ただし、この混血は科学的に不可能とされる。）犬とはいえライオンほどの体の大きさを誇る獰猛な犬で、ステイプルトンはこの犬をよく訓練していた。

4. 医師・科学者のイメージ

狂犬病と戦ったのは警察官だけではない。医師たちもこの病気の謎を解き明かし、治療法を開発しようと懸命になっていた。自身が医師であったドイルは、医師を主人公とした短編を集めた*Round the Red Lamp: Being Facts and Fancies of Medical Life*という作品集を発表している。この作品の執筆動機として、序文でドイルは次のように述べている。

If you deal with this life at all, however, and if you are anxious to make your doctors something more than marionettes, it is quite essential that you should paint the darker side, since it is that which is principally presented to the Surgeon or the Physician. (*Round the Red Lam*p, 5)

医師のdarker sideを描くという序文通り、この短編集には、例えば手術を前に卒倒してしまう医師の話など、聖職としてのイメージとは異なる医師の姿を描いた様々な挿話が収録されている。この短編集はドイルが医師の負の側面を認識し、重要視していたことを示している。

先述したように、パスツールは1885年に狂犬病ワクチンの開発に成功している。本来なら、彼ら医師たちは狂犬病に怯える人々から敬意を払われるべき存在である。しかし、この時代の医師は必ずしも尊敬を集めていたわけ

ではない。パスツールは狂犬病ワクチン開発の過程で、動物の生体解剖を行っていた。具体的には彼は猿に狂犬病の病原菌を移植する実験を行っている。生体解剖はとりわけ1870年代にその是非を巡って論争になった行為で、医学の進歩に貢献するとはいえ、動物愛護者からは残酷行為として非難された。イギリスにおける生体解剖反対運動で中心的役割を担った女性で、犬を主人公とした小説も執筆しているフランシス・コッブはパスツールを厳しく批判している。パスツールは狂犬病ワクチンを開発した英雄でありながら、同時に残酷な動物虐待者でもあるととらえられたのだ。

この時代の医師たちは、パスツールのように正反対のイメージを帯びる者が少なくなかった。例えば、オスカー・ワイルドの父、ウィリアムはヨーロッパ中にその名がとどろくほどの名医でありながら、患者の女性をレイプしたとして訴えられたこともある。リチャード・D・オールティックが『ヴィクトリア朝の緋色の研究』に「医者を信用するなかれ」と題した章をもうけたのも示唆的である。ここでオールティックは医師にして殺人者だったウィリアム・パーカーらに言及しながら、次のように述べている。

本当に偉大なヴィクトリア朝の医者の多くは比較的世に知られずに仕事をし、業績もだいたいは同業者仲間に認められただけだった。（中略）ところが、倫理的あるいは科学的な過ちを犯した者たちは、その数にはとうてい見合わないほどのたいへんな悪評を勝ち取ってしまった。（『ヴィクトリア朝の緋色の研究』210 ～ 211）

そもそもイギリスで薬剤師法が成立したのが1815年、医師法が成立したのが1858年で、それ以前は藪医者（quack）と呼ばれる者たちが横行し、稚拙な医療を施し、患者をより苦しめることもあった。医師のイメージが完全には確立していない時代であった、と言っても良い。

医学、科学の最新の知見をもって病気と戦う医師が、その知見を悪用すれば社会に害をなす悪となる。一流の科学者（医師）が犯罪と結び付けられる、

という設定の例は、この時代の文学に無数にある。フランケンシュタイン博士、ジキル博士、モロー博士といったいわゆるマッドサイエンティストたちである。マッドサイエンティストものの文学が多く創作されたことの背景には、社会に恩恵をもたらすと同時に恐怖をももたらす科学者（医師）たちに対する人々のアンビヴァレントな感情があった。19世紀のイギリスは、産業革命以後の科学技術の進歩が目覚ましく、その成果を享受する一方、その急激な進歩に対する恐怖心も生まれた。こうした対照的な科学に対する反応が、科学者に対する二つの相反するイメージを生んだ。それは「英雄」としての科学者と、マッドサイエンティストとしての科学者のイメージである。そして、この2つのイメージを一人の科学者（医師）が同時に帯びることも珍しくなかった。パスツールは英雄にして、マッドサイエンティストでもあったのだ。文学に登場するマッドサイエンティストたちは、程度の差こそあれ、科学の進歩のみに専心し、知識のための知識を追及し、道徳や倫理といったものを意に介さない存在として描かれている。

こうした二つの科学者に対するイメージが、『バスカヴィル家の犬』では二人の人物に仮託され、戦うことになる。その二人とはホームズとステイプルトンである。

5　ステイプルトン

『バスカヴィル家の犬』の犯人役であるステイプルトンは名の知れた博物学者（naturalist）で、特に昆虫学においては権威であった。ワトソンと初めて出会ったとき、珍しい蝶を見つけ、捕虫網をもって蝶を追いかけ回すステイプルトンの姿が描かれる。ワトソンはステイプルトンの内面を見ぬき、次のようにその印象を語っている。

In that impassive colourless man, with his straw hat and his butterfly net, I seemed to see something terrible－a creature of infinite patience and

craft, with a smiling face and a murderous heart. (109)

ステイプルトンが住むメリピット荘には鱗羽類のコレクションがあり、surgery（手術室）がある。その一室は次のように描写されている。

The room had been fashioned into a small museum, and the walls were lined by a number of glass-topped cases full of that collection of butterflies and moths the formation of which had been the relaxation of this complex and dangerous man. (132 ～ 33)

上記の引用にあるような実験室、手術室はマッドサイエンティストものの小説にはしばしば登場するものである。ステイプルトンはジキル博士のようなマッド・サイエンティストの系譜に連なると考えられる。

ステイプルトンは科学やその知識がもたらす負の影響を象徴する存在である。彼は科学者としての知識を犯罪に利用している。例えば、彼は呪いの魔犬に仕立てるために犬に燐を塗るが、燐が犬の嗅覚を狂わせないことを知ったうえでの行為である。このような発想は科学に対する知識なしには生まれてこない。

また、ステイプルトンは妻ベリルを妹と偽り、二重結婚も厭わない。ベリルは夫の犯罪に薄々気づいており、ワトソンにダートムアから立ち去るように警告する。しかし、夫への恐怖から決定的な行動にまでは踏み込めない女性である。夫婦間に愛情は感じられず、ステイプルトンはしばしば彼女を虐待し、ヘンリー・バスカヴィル襲撃の際には、ベリルを縛り上げることまでしている。19世紀は今日よりも遥かに科学が男性と結び付けられた時代で、女性が科学の担い手としての男性の犠牲になることもしばしばであった。ベリルも酷薄な男性科学者の犠牲者しての女性の典型と言える。

ホームズと同等の知力をもつライヴァル、モリアーティ教授もある種のマッドサイエンティストと呼べるだろう。また、「まだらの紐」に登場する

ロイロット医師もヘビを使っての殺人を計画する。「這う男」に登場するプレスベリー教授は猿の血清を使って若返りをはかる。なお、非ホームズものの短編 'A Physiologist's Wife'(*Round the Red Lamp*収録)でもドイルはマッドサイエンティストを描いている。この作品に登場する生理学者Ainslie Greyは、男女の恋愛すら医学的言説でもって理解しようとする。モリアーティ教授をホームズのイドとする主張もあるが(5)、これに従えば、ホームズは科学者のスーパーエゴ、モリアーティが科学者のイドということになろう。

なお、ドイルの作品にしばしば登場する悪魔的な医師のモデルとして、ドイルの学友ジョージ・バッドが考えられる。彼は学生時代から変わり者で、天才的な閃きを見せる反面、開業してからも雑な治療を繰り返し、ドイルに金を無心したりした。ステイプルトンやモリアーティの原型はバッドかもしれない(6)。

6. 英雄としてのホームズ

「英雄」としての科学者の側面を象徴しているのが、言うまでもなくシャーロック・ホームズである。恐怖の物語は、ホームズの登場とともに科学的に解明され、一気に解決に向かう。

ステイプルトンは実はバスカヴィル家の血をひく者で、犯行動機はバスカヴィル家の財産であった。ホームズはバスカヴィル家の呪いの元凶・残忍なヒューゴー・バスカヴィルの肖像を見て、それがステイプルトンと瓜二つであることに気付く。これは明らかにチェーザレ・ロンブローゾの犯罪人類学の影響であるが、当時の最新の科学的知見を用いている。燐を用いた呪いの魔犬のトリックも科学的に解明される。法医学史の研究家であるE.J.ワグナーは、ホームズ物語を手掛かりとして19世紀における科学捜査の発達を解説しているが、それだけホームズの探偵術が科学的であったということであろう。

一方、ホームズの引き立て役としてしばしば登場するスコットランド・ヤー

ドのレストレード警部はやや愚鈍な存在で、ホームズの科学的捜査法に拒否感を示す。科学捜査に対するこうした態度は当時の警察官としては典型的なものであったようで、科学者としてのホームズの引き立て役として機能している。

ホームズがドイルの指導教授であったエディンバラ病院のジョゼフ・ベル博士をモデルとしていることは有名である。ホームズの推理法は医者の診断法に似ているという指摘もある(7)。

医学が未発達だった時代は、聖職者がしばしば医者の役割を果たしていた。19世紀においてなお、狂犬病に対する治療は、医療というよりもまじないに近いものがあった。世紀後半に入ると、医療技術が進歩し、例えば先述したように狂犬病の治療法も発見されるようになる。広い知識と技術を身につけ、人々を病気から救う医師たちが、聖職者の代わりに英雄に祭り上げられるようになったのである。『バスカヴィル家の犬』では、ホームズは狂犬病と戦う科学者・医師を象徴し、残酷な動物の生体解剖まで行うマッドサイエンティストを象徴するステイプルトンと対置されている。

Roslynn D. Haynesは英雄としての科学者を幾つかのタイプに分類しているが(8)、その一つに「探偵としての科学者」がある。その代表は言うまでもなくホームズである。ただし、ホームズは同時代に発表されたオースティン・フリーマンの作品に登場する科学者探偵・ソーンダイクと比べるとかなり毛色の異なる探偵である。Haynesはホームズの特徴をcoolnessとlack of social involvementであるとしている。

実はホームズ自身がマッドサイエンティストとしての資質をかなり持ち合わせており、一歩間違えばモリアーティ教授やステイプルトンになりかねない危うさを秘めている。その意味でもホームズとステイプルトンは表裏一体と言える。

ホームズがかなりエキセントリックな人物であることはよく知られている。ホームズがコカイン常用者であることも有名だ。『緋色の習作』で初登場したホームズは、毒物の効用を試すためなら友人に毒を盛りかねない、と

紹介される。（なお、ドイル自身も学位習得のために、亜硫酸アミルを自分自身で試したことがあるという。）また、ホームズは解剖室の死体をステッキで叩いて回ることもあるという。これは『ジキル博士とハイド氏』にヒントを与えたというウィリアム・バークとウィリアム・ヘアの事件の影響があるという指摘もある(9)。ホームズが医者と犯罪者をモデルにして創造されているというのは興味深い。他にも、ホームズは事件解決のためなら結婚詐欺や金庫破りも厭わない。

結局、ホームズもステイプルトンも同じくマッドサイエンティストに分類されうる存在であり、科学、医学の知識が社会にもたらす恩恵と恐怖を体現していると言えよう。ステイプルトンは犬に関する知識や狂犬病に対する恐怖を悪用して犯罪を企てた。ホームズは逆に、それらの知識を用いて犯罪を未然に防ぎ、英雄になった。科学の暴走を食い止めるのも科学の役割ということであろう。

一方、コナン・ドイル自身にとっての理想の医師はワトソンであったという。ワトソンは医師としては凡庸ながら極端に走ることなく人と接する穏やかな性格の持ち主で、ドイル自身に似ていたという。江戸川乱歩は、E・A・ポウの「モルグ街の殺人」その他の作品に登場する探偵役のC・オーギュスト・デュパンが作者ポウ自身であるのに対し、ホームズはドイルではなく、ワトソンがドイルだと指摘している(10)。その人気とは裏腹に、ドイル自身はホームズものが好きではなかった。「最後の事件」でホームズを、モリアーティ教授もろともライヘンバッハの滝に落として殺してしまったのも、ドイル自身にとってはホームズが必ずしも理想の医師（科学者）ではなかったからであろう。しかし、狂犬病を背景とした犬の恐ろしさを核とした物語を書くにあたっては、これに対抗すべき英雄としてのホームズが必要となったのだ。

なお、英雄としての科学者としては、ドイルが創造したもう一人の英雄、チャレンジャー教授がいる。彼はホームズに近い存在であるが、より活動的な冒険者で、『失われた世界』その他のSF冒険小説で活躍している。

英雄としてのホームズのイメージは医師のイメージに留まるものではな

かった。1940年代に公開されたベイジル・ラスボーン主演の一連のホームズものの映画は、原作のないオリジナル・ストーリーのものもあるが、ホームズがイギリスの為にナチス・ドイツと戦うものが多い。ナチスも科学を悪魔的に利用し、人体実験を繰り返したり、V2ロケットでロンドンを攻撃したりした。ヒトラーとナチスの科学者たちを倒すためにホームズは駆り出されたのだ。

まとめ

狂犬病の流行は人々の道徳心の低下、ひいては社会の退廃の象徴と取られた。そのため、狂犬病を抑え込むことが道徳の回復につながるという発想が生まれ、犬への残酷行為へと繋がっていった。

このような犬への残酷行為に反対する声も同時に上がってくる。19世紀は、動物への虐待行為と、それに反対する動物愛護運動がせめぎ合った時代である。先に引用した作家･ウィーダは犬に口輪をはめることに強く反対し、『フランダースの犬』その他の作品で、犬への蛮行を描き、これを非難した。彼女のような動物愛護派にとっては、動物への残酷行為こそ退廃の元凶であったのだ。ドイル自身も娯楽のために動物を殺すことには反対していたとされるが、『バスカヴィル家の犬』は人と犬の関係が大きく揺らいだ時代の産物であったのだ。

『バスカヴィル家の犬』が発表されたのち、イギリスでは動物愛護のための法整備が一層進み、今日では動物愛護の先進国とも言われる。狂犬病も根絶された。狂犬病に対する恐怖はイギリス人には遠いものになっている。しかし、現代アメリカのホラー作家・スティーヴン・キングの『クージョ』が狂犬病の恐ろしさを描いた作品であったように、世界的に見れば狂犬病の脅威は消え去ったわけではない。『バスカヴィル家の犬』を狂犬病恐怖が生み出した作品と見る時、このミステリの古典をまた違った観点から見ることができるだろう。

注

(1) ジョン・ディクスン・カー著、大久保康雄訳『コナン・ドイル』279 ～ 280ページ参照。
(2) Neil PembertonとMichael Worboysは*Mad Dogs and Englishmen: Rabies in Britain, 1830-2000*の158 ～ 161ページでこのことについて詳説している。
(3) 高山直秀著『ヒトの狂犬病　忘れられた死の病』の16ページから24ページにかけて、そして60～61ページにかけて、狂犬病の症状について解説されている。
(4) ハリエット・リトヴォの『階級としての動物』の第2部第4章「犬に気をつけろ」が、この時代の狂犬病恐怖について詳しい。
(5) 山田勝『孤高のダンディズム　シャーロック・ホームズの世紀末』176ページ参照。
(6) ジョージ・バッドについてはグラハム・ノウンの『シャーロック・ホームズの光と影』第1部参照。
(7) 小林司、東山あかねの『シャーロック・ホームズの醜聞』173ページ参照。
(8) Roslynn D. Haynesの*From Faust to Strangelove: Representations of the Scientist in Western Literature*の第11章（178ページ）参照。
(9) 小林司、東山あかね訳の『緋色の習作』の訳注199 ～ 200ページ参照。
(10) 創元推理文庫の『ポウ小説集』4巻に収録された江戸川乱歩の論文「探偵作家としてのエドガー・アラン・ポウ」参照。

テキスト：

Doyle, Arthur Conan. *The Hound of the Baskervilles*. Hertfordshire: Wordsworth Classics, 1999.

参考文献：

Doyle, Arthur Conan. *Round the Red Lamp: Being Facts and Fancies of Medical Life*. Leipzig: Bernhard Tauchnitz, 1895.

Haynes, Roslynn D. *From Faust to Strangelove: Representations of the Scientist in Western Literature*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press., 1994.

Pemberton, Neil and Michael Worboys. *Mad Dogs and Englishmen: Rabies*

in Britain, 1830-2000. Houndmills, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2007.

Rosenberg, Samuel. *Naked Is the Best Disguise: The Death and Resurrection of Sherlock Holmes.* Indianapolis, New York: The Bobbs Merrill Company, INC, 1974.

The Sherlock Holmes Book. New York: DK Publishing, 2015.

アーサー・コナン・ドイル著、小林司、東山あかね訳『バスカヴィル家の犬』河出書房新社、2014年。

―『緋色の習作』河出書房新社、1997年。

飯田操『それでもイギリス人は犬が好き　女王陛下からならず者まで』ミネルヴァ書房、2011年。

E.J.ワグナー著、日暮雅通訳『シャーロック・ホームズの科学捜査を読む　ヴィクトリア時代の法律学百科』河出書房出版社、2009年。

R.D.オールティック著、村田靖子訳『ヴィクトリア朝の緋色の研究』国書刊行会、1988年。

グラハム・ノウン著、小池滋他訳『シャーロック・ホームズの光と影　ホームズ100年、その生涯と時代』東京図書、1998年。

小林司、東山あかね『シャーロック・ホームズの醜聞』晶文社、1999年。

ジュリアン・シモンズ著、深町真理子訳『コナン・ドイル』東京創元社、1984年。

ジョン・ディクスン・カー著、大久保康雄訳『コナン・ドイル』早川書房、1980年。

ジョン・サザーランド著、青山誠子他訳『ジェイン・エアは幸せになれるか？』みすず書房、1999年。

ジョン・ラドフォード著、小林司他訳『シャーロック・ホームズ 事件と心理の謎』講談社、2001年。

高山直秀『ヒトの狂犬病　忘れられた死の病』時空出版、2015年。

富山太佳夫『シャーロック・ホームズの世紀末』青土社、2014年。
ハリエット・リトヴォ著、三好みゆき訳『階級としての動物　ヴィクトリア時代の英国人と動物たち』国文社、2001年。
ピエール・バイヤール著、平岡敦訳『シャーロック・ホームズの誤謬 「バスカヴィル家の犬」再考』東京創元社、2011年。
水野雅士『ホームズ探偵学序説』青弓社、1999年。
山田勝『孤高のダンディズム　シャーロック・ホームズの世紀末』早川書房、1991年。